



TITLE:

本邦湖沼干拓の地理学的研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

斎藤, 晃吉

CITATION:

斎藤, 晃吉. 本邦湖沼干拓の地理学的研究. 京都大学, 1964, 文学博士

ISSUE DATE:

1964-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211196>

RIGHT:

【 3 】

氏 名	齋 藤 晃 吉
	さい とう こう きち
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 4 号
学位授与の日付	昭 和 39 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	本邦湖沼干拓の地理学的研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 織 田 武 雄 教 授 小 葉 田 淳 教 授 赤 松 俊 秀

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、わが国の水田稲作農業における排水技術の問題を中心に、低湿地域の水田造成から江戸時代の湖沼干拓、さらに動力揚排水機の導入による現在の近代的湖沼干拓に至るまでの発展過程を、地理学的な見地から究明を試みたものである。

著者によれば、自然灌漑にもっぱら依存した初期の水田農業においては、稲作は灌漑の困難な早魃の生じやすい土地よりは、むしろ湛水状態に近い低湿地に多く行なわれたという。

第1章では、かかる低湿地の土地生産力を高め、生産を安定化するための水田造成の方法としては、いわゆる掘上田にはじまるものとみなし、著者は、掘上田が今日なお残存する鎧潟（新潟県）・十二町潟（富山県）をはじめ、旧利根川流域の見沼・河原井沼などの湖沼周辺において、掘上田の機能や形態について詳細な調査を行なっている。また掘上田は湖沼沿岸ばかりでなく、河川の後背低湿地にもみられることを、濃尾平野の輪中地域について論証し、掘上田による水田造成が、江戸時代にはじまる湖沼干拓の前段階をなすものと推定する。

第2章では、掘上田からさらに進んで、排水によって湖面を干拓する技術が享保ごろに一応の完成をみたことを、江戸時代に行なわれた多くの湖沼干拓に基づいて明らかにし、とくに、干拓の成功した紫雲寺潟（新潟県）・椿海（千葉県）と、干拓の失敗した印旛沼（千葉県）・品井沼（宮城県）について比較し、干拓事業の経過や、その成否をもたらした原因について詳述している。また琵琶湖沿岸内湖の干拓も、既に江戸時代から計画されたにもかかわらず、湖面の水位を低下せしめるための瀬田川の浚渫は、下流の淀川沿岸に洪水を生ぜしめる危険があり、利害が相反して干拓が実現し得なかった経緯についても述べ、著者は動力揚排水機を欠く江戸時代では、自然排水の可能性が、湖沼干拓の限界をなしたことを指摘する。

第3章では、動力揚排水機の出現による干拓技術の近代化が取り扱われている。しかし明治・大正を通じて、ほとんど第二次大戦前までは、海岸干潟地の干拓と比較すれば、湖沼の干拓は停滞的であった。それは、江戸時代には新田開発が強行され、低湿地の水田造成はきわめて悪条件のところまで及んでいた

ので、明治以降は湖沼干拓よりも、もっぱら既成田の土地改良に重点が置かれたからである。したがって著者によれば、湖沼干拓の近代化に一時期を画したのは、昭和8年着工の、動力揚排水機の全面的な利用による巨椋池（京都府）の干拓であるという。この巨椋池干拓が契機となり、第二次大戦中、および特に戦後、食糧増産対策の一環として、湖沼干拓は国営事業をもって全国的に大規模に施行されるようになり、琵琶湖内湖・霞ガ浦・十三潟などをはじめ、最近では八郎潟の干拓も行なわれた。著者はこれらの干拓事業について言及するとともに、今後の湖沼干拓においては、従来の農地造成のみではなく、灌漑・工業用水の利用など、地域開発の一環として湖沼干拓も組み入れた総合計画が必要なことを、中海干拓事業計画に基づいて論じている。

第4章・第5章は、河北潟・邑知潟・福島潟・柴山潟など、北陸地方の潟湖についての研究である。これらの潟湖は、部分的な干拓のみで、なお未干拓の湖面が広く残存しているが、著者は湖沼地形・湖底堆積物・湖面水位の変化など、潟湖の自然的条件と干拓の関係について、生態学的方法を加えて考察し、さらに用水源として、また漁業資源としての潟湖の利用と今後の干拓計画についても論及している。

論文審査の結果の要旨

わが国の農業は水田稲作に中心が置かれているため、古来土地開発は灌漑施設の発達による水田造成に負うところが多く、また干拓による土地開発も、瀬戸内海や有明海沿岸など、干満の差が大きく、干潮時には海面よりも高い干潟地が広く露呈する沿岸に主に行なわれてきた。したがって灌漑や干潟地干拓による土地開発を論じた研究は、地理学においても少なくない。

これに対して、著者は湖沼沿岸低湿地の排水による開発に着目し、掘上田による低湿地の水田造成から、江戸時代の自然排水による湖沼干拓、さらに明治以降の動力揚排水機による近代的湖沼干拓への発達過程を、歴史地理学的に詳細に究明したことは、わが国の地理学の研究に大きな貢献をなしたものとして、その業績は高く評価されねばならない。

ただ著者がいうところの、掘上田による水田造成から湖沼干拓への技術的発展については、やや史料的検証に欠ける点がある。また、戦後の湖沼干拓は食糧増産のための農地造成に置かれていたが、その後の産業構造の変化や農業人口の減少によって、干拓入植の営農問題など、なお論ずべき問題も残されている。しかしこれらは今後の著者の研究に俟つとして、著者が本論文において、わが国の湖沼干拓について総合的な研究を行なった努力は誠に多とすべきであり、また現在実施されつつある干拓計画に対しても、寄与するところが少なくないであろう。よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。